〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ20

国指定重要文化財

紫裾濃鎧の胴

日本風俗史学会会員
前青梅市文化財保護審議会会長　齋藤　慎一

騎射戦のための大鎧の胴部分には、大腿部を防禦する大きな草摺、前・後・左（弓手・射向）がつき、右側草摺は肩への負荷軽減のため、脇楯につけて胴から切放されています。胴の前面に弦走という絵韋を張り、草摺の大きさは、後方が最も幅広く、以下前・左・右の順でせまくなります。

胴の基本構造単位は小札です。紫裾濃の小札は、長さ（札足）7.0cm、幅は上下同じで2.5cm、逆板部分一段の小札は厚くやや大きいが、鎌倉中期の小札の形状と寸法です。逆板は上重ねに下の段に続ける威方で、固い肩上部分を後方に倒して着用しやすくする大鎧独特の構造です。

紫裾濃の逆板と次の後立挙三段目の板との間の古い小石打の緒は畦目にも使われ、白・黄・萌葱・紺という配色が残り貴重です。同一の鎧の緒の配色は同じが原則です。従って現在の紫裾濃の新補の耳糸などの亀甲の組紐も、この色で復元されています。

さて、この鎧は紫裾濃という威の色どりを残す鎌倉期の鎧では、唯一の遺例です。背部の後立挙三段分は、一段目から白、二段逆板が菱縫、中紫、胸部の前立挙二段分は中紫。右脇をあけて胴を囲む長側四段の縄目迄は濃紫。長側四段目の毛引の白糸は揺糸として、三間（前・後・左）五段の草摺の一段目に続きます。草摺は一段目は縄目が白で毛引は黄、二段目中紫、三・四段濃紫、五段（菱縫板）の縄目濃紫です。

明治三六年修理の際、前後の草摺の二分割された菱縫板の左右を誤って入れ違えてしまっています。このために両端にくるはずの、初期のゆるい撓が中央に寄っています。

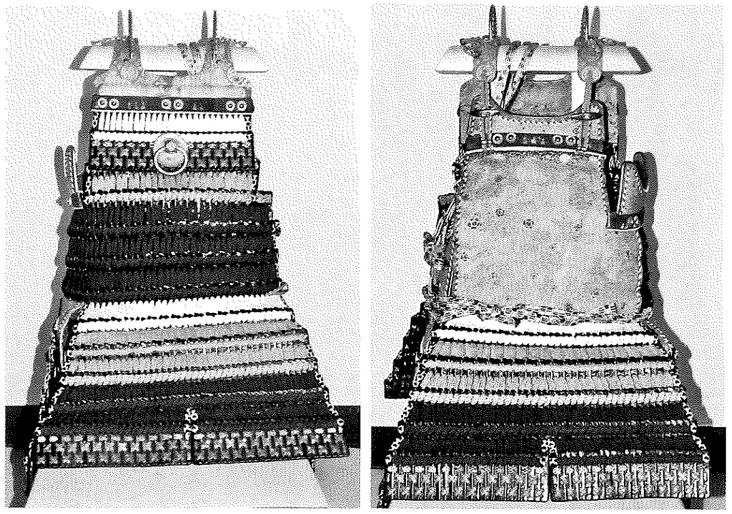
小札板は、前の胸板に続く反りのある前立挙二段は鉄交で、一段目22枚、二段目23枚、後立挙は肩上に続く一段目が27枚、二段目逆板が28枚、三段目29枚は鉄交で、前後の立挙の小札は下に向って一枚増です。長側は四段全部鉄交で、一段目から82枚・84枚・86枚・四段目（胴尻・発手）88枚と二枚ずつ下に向って増札で裾拡がりです。最下段の四段目胴尻は、鎌倉後期の裾のすぼまる大鎧にみる腰撓の外反もまだなく、古様です。

草摺は、前・後・左は二段迄鉄交で、右（脇楯・馬手）は「集古十種」にあるように五段全部革札。後期の厳島神社蔵浅葱綾大鎧は、右側馬手の二段も鉄交で、前と左は三段迄鉄交です。紫裾濃の三枚の増札に対し、浅葱綾は四枚ですから紫裾濃の方がより古いことがわかります。浅葱綾は長側も裾すぼまりです。草摺の増札が、紫裾濃と同じ三枚である防府天満宮蔵紫韋威鎧も、長側は、83枚・85枚・85枚・83枚と裾すぼまりです。裾拡がりの紫裾濃の胴の形式は中期でも古い年代です。

草摺の小札は三枚増。前の草摺一段目36枚なので、五段目（菱縫）48枚、後は同じく38枚・50枚、左は34枚・46枚、右（脇楯・馬手）は28枚・40枚となります。白・中紫・濃紫の糸は新補ですが、前・後・右の草摺の二段目の黄糸は、すべて古い糸です。増札のための増糸三箇所が、規則的に両端と真中にあること、毛立の長さ3cm・幅1.4cm・厚さ0.13cmと観察できて貴重です。

後立挙に続く肩上は幅28.5cm、

手先まで23cmで、反のある薄手の古雅な鍍銀の笠鞐をつけた赤韋丸紮の高紐を手先につけます。まだ半円形の傾向のある高さ5.5cmの古様を残す古い障子板（鍍銀覆輪）を両肩に立てますが、絵韋と足を止める笠鋲は新補です。肩上の下部に古びた菊花と葉の白と萌葱縦筋の赤地錦が残りますが、後世のもの。生革三枚重ねで表が赤地錦、裏一枚が絵韋包みの肩上は新補、障子板二枚と左側笠鞐一つのみが古い。逆板の総角付の大座の菊座径6.5cm以下、裏菊・小刻二重は後補、切子頭・鐶は古物です。



右は紫裾濃鎧の胴の正面、左は背面。鎌倉中期の重厚さと優美を造型する。

胸板は上幅23cm・下幅23.5cm・足一文字で長さ3.0cmの棚造、棚の奥行1.0cmで二孔一対の穴二対があって、前立挙一の板以下を赤韋で吊り上げて結び止める。足にも二孔一対の穴二対あり、古い責鞐をつけた長さ7.3cmの新補の赤韋丸紮の外取りにした高紐を小札に通した根をここで結び止めたようです。

17個の笠鋲で縁を止めた弦走、また胸板、左脇の蝙蝠付の絵韋は、小縁の五星赤韋と紫・白の綫の伏組と共に、藻獅子の復元模様で新補されたものです。古い元の藻獅子絵韋は、胸板の化粧板の紅韋と白綾の新補の水引の下にほそく、藍と紅の色あざやかに残り、「集古十種」も図示します。胸板覆輪も鍍銀で、中央裏面に鼻をつけ表から釘で止める古い例です。袖の覆輪と比較すると古物であることがわかります。八双鋲は、菊・裏菊・小刻二重・笠（鍍銀）で花弁を鍬出彫にした優美な制作ですが、弦走の小刻座付笠鋲と共にほとんど新補で、八双鋲は僅に胸板の化粧板の馬手側一対が、笠鋲は左側の隅の一つのみ古いようです。

また、左脇につけた棚造の脇板は、鎌倉後期の出現で、本来、鎌倉中期以前のこの鎧にはなく、明治三六年修理の折、誤ってとりつけたものです。

着装のための緒は、出し方も記録する享保一一年（一七二六）調査「武州御嶽鎧之図」では、亀甲文様の平組で、現在新補の緒も同じです。

まず引合の緒は、長側一段目の前後の端より三枚目の小札から各一条出し結び合す。腰を締る右からの繰締の緒は長側四段目の前端二枚目から二条出すが、一条が正しい。この緒をかけて引戻す綰としてて、後端の三・四枚目から赤韋丸紮の綰と、二枚目から平組緒の綰も出すが、重複なので赤韋の綰は不要。引戻した緒と結び合せる左からの繰締緒を、左脇の弦走よりに赤韋の根緒を出し緒二条をつけるが、三段目の左脇の前よりで一条出すべきでしょう。

胴の前の方は、胸板中央から草摺の裾まで62cm、後は肩上の中央からで68cm。重量は12.2kgあります。